

本紙は、農業や食料に関する情報をデータで提供し、農業関係者から消費者まで、多くの皆さんが農産物の生産・消費に興味を持ち・考えていただく材料として発信しています。

今回は、有機農業に取り組んでいる農業者や流通加工業者を対象に行った意識・意向調査の結果を紹介します。

また、現地レポートとして、①矢巾町で有機農産物の集出荷や加工販売に取り組む小野節子さんの「スイス有機農産物事情」のお話し、②岩泉町で行った「地域おこし協力隊との意見交換」の様子を紹介します。

本紙が、食料・農業・農村の現状を考える一つのきっかけとなれば幸いです。

1 有機農業等の取組に関する意識・意向調査結果（令和3年度）

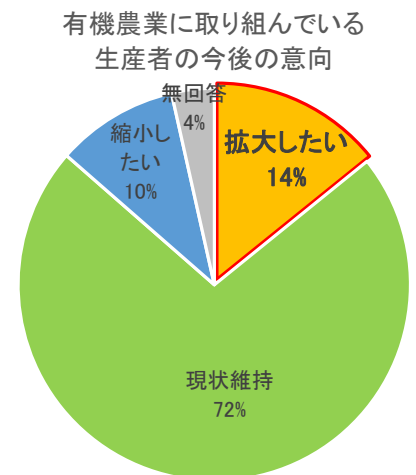
本調査は、有機農業に取り組んでいる生産者 4,000（回答 2,647）人^{（注）} と、流通加工業者 4,000（回答 1,201）事業所を対象に調査を行ったもので、結果は全国集計値となります。

（注）2020 年農林業センサスで、「有機農業に取り組んでいる」と回答のあった生産者。

（1）今後の意向

① 生産者の意向

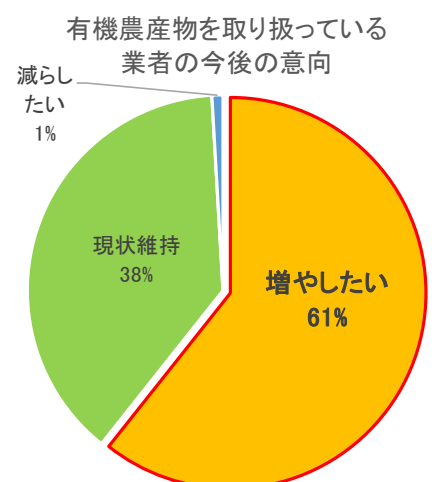
有機農業に取り組んでいる生産者の今後の取組面積の意向は、「現状維持」が7割以上で、「拡大したい」とする生産者は14%となっています。



② 流通加工業者の意向

有機農産物^{（注）}を取り扱っている流通加工業者の今後の取扱意向は、「増やしたい」とする業者が6割以上となっています。

（注）「国産」の有機農産物を対象に回答いただいた結果である（以降同じ）。



資料：有機農業等の取組に関する意識・意向調査結果（令和3年度）

面積を増やしたいとする生産者が14%であるのに対し、取り扱いを増やしたいとする業者は61%となっています。

このことから、有機農産物は流通加工業者からは求められているものの、生産は伸びない状況となっていることが考察されます。

次ページでこの状況を考えてみます。

(2) 「拡大したい」「増やしたい」理由

① 生産者が面積を拡大したい理由

有機農業に取り組んでいる生産者が「取組面積を拡大したい」とする理由は、「よりよい農産物の提供したい」が6割以上と最も多く、次いで「環境負荷を少なくしたい」、「生物多様性を保全したい」が多い状況となっています。

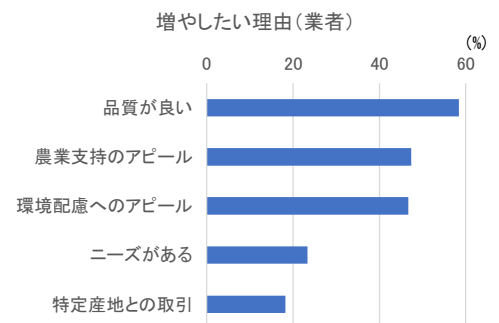
有機農業に取り組んでいる生産者の環境に対する意識の高さがうかがわれました。



② 流通加工業者が取扱量を増やしたい理由

有機農産物を取り扱っている流通加工業者が「取扱量を増やしたい」とする理由は、「品質がよい」が6割と最も多く、次いで「国内農業支持をアピールできる」、「環境への配慮をアピールできる」が多い状況となっています。

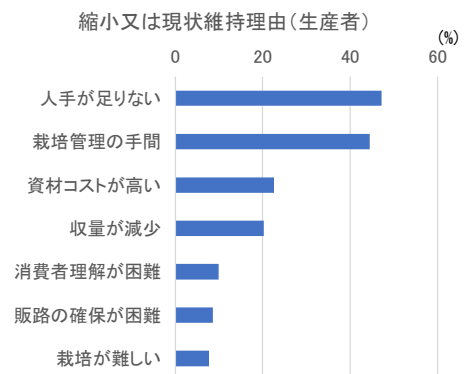
流通業者も、生産者同様に環境を意識していることや、地域農業支援の意識がうかがえます。



(3) 生産者が「拡大したくない」理由

有機農業に取り組んでいる生産者が「取組面積を縮小したい」又は「現状維持」とする理由は、「人手が足りない」、「栽培管理に手間がかかる」が多く、有機農産物の生産に労力を用することへの理由が多い状況となっています。

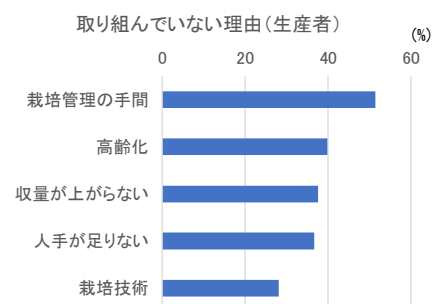
また、農業の生産現場全体の課題となっている、高齢化や担い手不足による労力不足も影響していると考えます。



(4) 「取り組んでいない」「取り扱っていない」理由

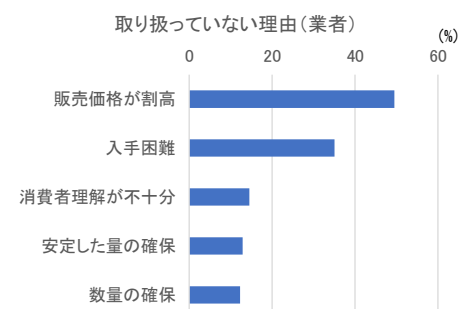
① 有機農業に取り組んでいない生産者の理由

有機農業に取り組んでいない理由は、「栽培管理の手間」や「高齢化」、「人手が足りない」等労働力に関わる理由が多い状況となっています。



② 流通加工業者が有機農産物を取り扱っていない理由

有機農産物を取り扱っていない流通加工業者の「有機農産物を取り扱わない」理由は、販売面の課題となる価格や消費者理解のほか、生産者から安定して入手できるかを危惧する理由が多い状況となっています。



資料: 有機農業等の取組に関する意識・意向調査結果(令和3年度)

2 環境に配慮した農産物生産の取組

<小野 節子（オネットマーケットプラン株式会社）>

矢巾町の「オネットマーケットプラン株式会社（代表：小野節子）」は、有機農業に取り組む生産者の支援として、生産された農産物の集荷・加工・販売及び販売業者とのマッチングを行っており、生産者が安心して農作物生産に取り組めるバックアップ活動を行っています。

代表の小野さんは、有機農産物イベントに実行委員として関わったことやお孫さんがアトピーだったことなどから有機農産物に関心を持ち、少しでも多くの消費者に届けたいと思うようになり、2014年4月に「オネットマーケットプラン株式会社」を起業しました。

また、「取り扱う農産物のことや生産者の苦勞を知ることが重要。」と、自身も有機農産物の生産に取り組むようになり、さらには、有機農産物を使用した加工品を製造し販売するなど、意欲溢れる活動に生産者からの信頼も大きいです。

小野さんは、今回の年末年始に、有機農産物の消費金額が世界一であるスイスを訪れ、現地の状況を見学してきました。

その様子をお伝えします。

----- 小野さんから -----

スイスでは、環境に対する意識の高い消費者が多く、スーパーに多くの有機農産物が陳列されており、中には、オーガニック商品だけを取り扱うスーパーもあります。

また、陳列された青果物は量り売りされている物が多く、日本ではあまり見かけることの少ない、大小が混在した商品や自然果（虫食い等の野菜・果樹）が並んでおり、消費者はそれを当たり前購入しています。

この量り売りは、生産された青果物の出荷口スが少なくなるばかりでなく生産者の選別等の労力削減にもつながり、かつ、余計な包装等がないため環境に優しい販売方法となっています。

畜産物にも興味があり、現地の鶏舎を視察させていただきました。

鶏は広い鶏舎で元気に飛び回っています。また、日本では考えられない、屋外運動場もあります。健康な鶏を育てることで健全な卵を産んでいただくというスタイルです。

もちろん、卵のパッケージは環境を考えて紙です。

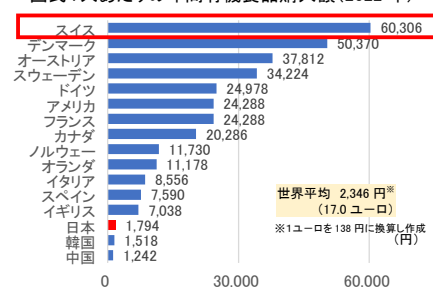
今回のスイス視察で、日本の消費者の方々にスイスの状況を伝えることが、日本の農業・食料を守ることに繋がると感じました。

健全な食べ物は健全な体をつくります。次世代の子供たちのためにも頑張ります！



小野さん(右)と
スイス在住のお孫さん

国民1人あたりの年間有機食品購入額(2022年)



バラ売りの様子



セルフ計量器



伸び伸び育つ鶏



自然栽培りんご



自然栽培野菜



大小混在



オーガニック商品だけ扱うスーパー

3 農村活性化に向けた取組

＜岩泉町地域おこし協力隊との意見交換＞

令和6年12月23日に岩泉町役場を訪問し、同町で農業・農村関係の活動に取り組んでいる6名の地域おこし協力隊と、活動内容や課題、任期終了後の展望等について意見交換を行いました。

隊員の皆さんの活動は、畑わさび栽培が4名、果樹栽培が1名、野菜栽培が1名で、作物栽培のほかにも、食文化の継承や民泊、農村生活のPR等、多様な取組を行っています。

岩泉町は生産量日本一を誇る畑わさびの産地ですが、高齢化等による労働力不足の課題を抱えています。町では、この問題を解消するため、2019年から地域おこし協力隊による畑わさび栽培の促進を始め、現在、10名程度の隊員（任期終了後の定住者含み）が地元生産者と共に取り組んでいます。



畑わさび

隊員への栽培技術指導は地元生産者が行う等、地域一体となった取組で、地元関係者からは、活気がでてきたとの声も上がっています。

畑わさび栽培に取り組んだ隊員に活動のきっかけを聞いたところ、「日本一のものに取り組んでみたい。」「仕事帰りの居酒屋で食べた刻みわさびに感動。自分で作ってみたい。」等、それぞれ思いを持って移住してきたことが伺えました。

また、隊員の皆さんは共通して、畑わさび等の生産だけでなく、多様な地域資源と結び付けた取組を考えており、「岩泉町の農産物と沿岸地域の海産物を併せたPRを考えている。」「岩泉町ブランドや観光との結び付けを考えている。」「オーガニックの粉わさび加工品の輸出を考えている。」等、農村活性化に向けどう展開していくかの思いを強く話してくれました。

意見交換に同席した岩泉町農林水産課の三上総括室長は、「前職の経験値を持つ地域おこし協力隊のアイディアと行動力は町にとって大きな力。町の活性化に向けた活躍に感謝しています。」と、地域おこし協力隊の活動に期待を寄せていました。

岩泉町の活性化に向け活躍する、地域おこし協力隊の皆さんを応援しています。



意見交換の様子



地域おこし協力隊の皆さん



林間の畑わさび

本紙は、将来の農業の担い手、労働力不足解消に向けた取組について考える材料としてご活用ください。また、当拠点では農林水産データの活用支援を行っています。遠慮なくご相談ください。

＜みどりの食料システム戦略＞

食料・農林水産業の生産力向上と持続性の両立をイノベーションで実現する「みどりの食料システム戦略」に取り組んでいます。



<https://www.maff.go.jp/j/kanbo/kankyo/seisaku/midori/index.html>

＜総務省「地域力の創造・地方の再生」＞

地域おこし協力隊～移住・地域活性化の仕事へのチャレンジを支援します！

https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/c-gyousei/02gyousei08_03000066.html

＜ニッポンフードシフト＞

「食」から「農」について自ら考えていただくことで、将来の「食」「農」を守っていく取組です。

主に、次世代を担う若い世代をターゲットとして情報を発信しています。

<https://nippon-food-shift.maff.go.jp>



東北農政局岩手県拠点
岩手県盛岡市盛岡駅前北通1-10
019-624-1125

MAFF